The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フィールディングの「この世」への旅立ち ： 『リスボン渡航記』の憂鬱と満足
Author(s)	服部, 典之
Citation	Osaka Literary Review. 2016, 54, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54722
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フィールディングの「この世」への旅立ち
――『リスボン渡航記』の憂鬱と満足

服部　典之

1.　イントロダクション

ヘンリー・フィールディング生涯最後の作品（死後出版）である『リスボン渡航記』(1755) についての決して多いとは言えない先行研究は、フィールディング自身の無残な肉体的衰えと障害の事実をその作品の描写の中に過度に読み込み、フィールディングと『リスボン渡航記』の悲観を前面に出したものがほとんどである（代表的なものがバウワーズ)。確かに痛風と水腫と喘息の持病を抱えたフィールディングは、この船旅にあたって四肢の機能をほぼ失っており、船に乗り込むためには車椅子を滑車で釣り上げてもらう必要があったし、水腫で膨れあがる腹水を抜くために穿刺を定期的に行わなくてはならなかった。フィールディング自身も、自分は「死を軽蔑する」(567) ことを学んだと冒頭で書いているし、鳥居塚正の翻訳に序文を寄せているダグラス・ブルックス-デイヴィスもフィールディングの本作について「太陽に向かって旅をすることで死を騙そうとする男の記録だ」(306) としている。しかし、論者はこの作品について、フィールディングに迫り来る「死」に挑みかかったり、傲岸な態度または悲観を表明したりすることがその眼目だとは考えない。作中常に見せるフィールディングの異様な食欲は、それによって「死に神よ退散しろ！」というようなやけくそな身振りではなかろう。

『リスボン渡航記』が影響を与えたトバイアス・スモレットの『ハンフリー・クリンカー』(1771)はブリテン国内ではあるが同じ旅行記であり、晩年に書かれた本作の主人公ブランブルは旅を先導する郷士だが、病気が

ちな苦しさからシニカルになりがちな懐疑主義者である。フィールディングが『リスボン航海記』執筆の後リスボンで客死したのと同じく、療養旅行中イタリアで客死したスモレットを想起させる『ハンフリー・クリンカー』の主人公ブランブルに特徴的なことでもあるが、作品には迫り来る死への諦観と静謐が見られる。作品の成立の仕方は似ているものの、フィールディングの作品とは大きく性質が異なっているのだ。

本論は、「あの世」と「この世」について書かれたフィールディングの三作品、『ジョーゼフ・アンドルーズ』（1742）、『この世からあの世への旅』（1743）、『リスボン渡航記』を取り上げ、二つ目の作品のタイトルとは反対に、フィールディングの旅の意識は多少の濃淡の差はあるにせよ、むしろ「あの世」に対置させることで常に「この世」を志向していたことを示すことを目的とする。

2.　『ジョーゼフ・アンドルーズ』の俗世

この世からあの世すなわちエーリュシオンへの旅がしばしば冥府の裁判官ミーノースに遮られ、善人とも悪人とも判別のつかない霊魂がこの世に戻され、行きつ戻りつするように（『この世からあの世への旅』）、またリスボンへの渡航が度重なる風の変化で遅延に遅延を重ねるように（『リスボン渡航記』）、ジョーゼフ・アンドルーズもロンドンで女主人から解雇された後、田舎の恋人ファニーに逢おうと全速力で出かけるが、再三の脱線を余儀なくされる。

道中ジョーゼフは追いはぎに襲われ重傷を負い、宿屋に運び込まれる。ジョーゼフの命が危ういとする医者は、「もしこの世でやり残したことがあるなら、できるだけ早く片付けるように」（50 下線は論者、以後同様）と告げ、牧師も「自分は、お前のために祈り、あの世へいく準備をするためにやってきたのだ」（51）と述べ、ジョーゼフのあの世への旅立ちを助ける善人たちのようだ。なんと言われようが恋人のファニーに会いたいと

未練たっぷりなジョーゼフに、牧師は「この世の肉欲はすべて捨てなければならない」と説く。ジョーゼフは「この世であろうがあの世であろうがファニーのことは忘れられない」と言い返す。

一見、牧師の〈聖〉とジョーゼフの〈俗〉が対比されているようである。牧師はあの世のことを the next World や above と言って、天上界の精神的なるものを志向するように諭すが、ジョーゼフは自分がファニーと別れてあの世に行くことなど考えられず、遺されるファニーの気持ちと苦しさを考えるとそちらの方が遙かに辛いと述べる。自分の生死より遺された恋人の幸福に想いを馳せるのは、〈俗〉というよりむしろ本当の愛だと言えるだろう。

前者（牧師）の中でもこの〈聖〉と〈俗〉が同時に存在している。牧師のバーナバスは臨終の際の牧師としての勤めを一刻も早く切り上げて、階下で用意されている酒を飲みたくてうずうずしているのだから。ちなみに階下の英語は below であり、天上界を指す above の反対がリビングでの酒宴であるかのような対比になっている。

このように、このエピソードは〈聖〉と〈俗〉の対比を一旦形成しておいて、この崇高な枠組みが個人的な〈愛〉や〈飲食欲〉によって突き崩され、どうやら作者もそれこそが人間らしさなのだ、と述べているように思われる。〈聖〉は観念でしかなく、人間的な五欲に勝てない。それは次のエピソードでも明らかである。暴行した泥棒をキリスト教徒らしく赦しなさいと牧師が言うのに対し、ジョーゼフは、今度会ったら殺したいと述べ牧師に反論されるのだが、「ではキリスト教の赦しとは具体的にどのようなものなのですか」というジョーゼフの質問に牧師はたじたじとなり、這々の体で階下に逃げていくのだ。人間は大なり小なり〈俗〉に囚われているものであり、〈俗〉の素朴な理屈には〈聖〉は反駁できない、という展開になっているのである。〈聖〉を唱える者の胡散臭さも見て取ることができる。

この作品で〈聖〉に最も近いのはジョーゼフの友人で旅の同行者アダムズ牧師で、彼はその善良さ故に教区民皆に愛されているのだが、彼にしても生活が苦しく、ロンドンに行く最大の目的は自分の説教集を売って金銭を得ることである。この説教集出版に関して別の牧師と極めて〈俗〉なやりとりがあるので、当該箇所を見てみよう。

重傷のジョーゼフを看た医師と臨終の儀式を執り行っていたバーナバス牧師が酒を飲んでいたところにアダムズ牧師が加わるのだが、バーナバスは自分の経験から説教集など金にならず、世間には五千種類もの同種の説教本があふれていると言う。ここで、医師がある高名な牧師の説教を昔読んだがそのうち半分も実行したら天国（Heaven）に行けるだろうよ、と混ぜ返す。アダムズはこの言い方を非難して「そんな俗な（profane）言い方をしてはいけない」（66）と叱る。ただ、ここの会話の主たる話題は説教集が売れるかどうかという極めて〈俗〉なものであり、アダムズ牧師から葬式の説教を借りようとするバーナバス牧師の〈俗〉と併せて、語り手はこの会話全体を「このような種類の精神的（spiritual）会話」と皮肉な調子で評していることから、酒席であったこともあり、エピソード全体を滑稽なものとして茶化しているのが分かる。作品中最も高潔なアダムズすら〈俗〉なるこの世の毒から免れ得ていないことが示されるエピソードだと言えよう。

最後に、アダムズ牧師が、宿に入ってきた二人の紳士がある人物を巡って正反対の事実に基づいて逆の評価を下しているのを目撃して、彼らが帰った後、その宿屋の主人とあの世とこの世について議論している箇所を検討してみよう。

「自分が可愛ければなおさら真実のことしか言ってはいけない。そうじゃないと、自分の中の一番高貴なもの、つまり不滅の霊魂を傷つけることになる。つまらない利益のために一番大事なものを失う危険を冒す

ほど愚かな者がいるとは信じがたいことだ。この世での最も大きな利益もあの世で明らかになるものに比べればゴミに過ぎない。」主人はこれを聞いてグラスを取り上げて笑いを浮かべながら「あの世に乾杯！」と言い、さらに自分は現世の方がいいですな、と付け加えた。それを聞いたアダムズは厳粛な調子で「あの世を信じないのですか」と聞いた。主人は答えて、「自分は無神論者ではないので信じますとも。」「それで、不滅の霊魂は信じるのか」とアダムズ叫ぶ。「もちろん。」「では天国と地獄もか？」と牧師。主人はここでアダムズに冒涜的な（profane）言い方はやめるように命じる。「これらのことは教会の外で言うべきことではありません。」(85)

〈聖〉の立場から拝金主義のため日和見を決め込む宿屋の主人を詰問し、不滅の霊魂の「あの世」での幸福のためにはこの世の俗事（金儲けのための嘘）をやめるべきだと諭していたアダムズ牧師である。しかし逆に最後には主人からこのような神学談義を教会の外で行うことこそ〈俗〉であり、冒涜行為だと反撃されてしまう。このエピソードの滑稽な調子から、アダムズの真剣さが茶化されているのは明らかだ。二人の紳士が自分の利益次第で人物評が正反対であることについては、人間とはちょっとした自分の損得で大きな評価の違いを起こしてしまうものであることが語られ、語り手にはそれを軽く批判しながらも、おおらかに人間とはそんなものだと考える寛容な姿勢が感じられる。そう考えると、〈聖〉と〈俗〉のせめぎ合いは重要ではあるにせよ、それほど深刻に捉えるべき問題ではないという作者のスタンスが透けて見え、他のエピソードと共通していることが分かる。

3. 『この世からあの世への旅』における「この世」の記憶

『この世からあの世への旅』という作品の主人公は作品冒頭で「この人

生」から離別し、つまり死亡して体から脱け出して甘い開放感に浸ると同時に、自分を 40 年以上捕らえ続けていた肉体監獄を感慨深く眺めると共に自分の来し方を振り返るのである。フィールディングがこの作品を『雑録集』の中の一篇として公刊したのが 1743 年であるから彼の当時の実年齢は 36 だったのだが、10 年後に自分が 46 歳で亡くなることを予期していたかのように、亡くなった主人公は 40 代という設定になっている。

彼はメルクリウスの指示を受けて、「あの世」に旅立つべく辻馬車に乗り込む。乗り会った乗客たちは口々に、「下の世界の虚栄・愚劣・悲惨を述べ立てて、そこから救い出されてこれ以上嬉しいことはない」(12) と言うのだが、「自分が死に至った偶然の出来事に触れない者はおらず、そのことさえなければこの事態は避けることができたのだ」(12)と言って、死んだことを喜ぶべき事態であると捉えている様子はない。

次に辻馬車は悪臭に満ちあふれた「病の国」を通り抜ける。そこには病の女神がおり、彼女の助力のおかげで低い世界から救出されたのであるから、皆は彼女に敬意を表する。その後主人公一行は死の宮殿に到着し、冥府の裁判官ミーノースに裁かれることになる。判決は三種類であり、死後の天国であるエーリュシオン、底なし穴の地獄、もしくはこの二者いずれかの判定がつかない場合、もう一度人生をやり直すべく「この世」に追い返されるかのどれかである。

主人公はミーノースの前で申し立てを行う。

> 私は若い頃は酒と女に浸りました。でも誰一人たりとも危害を加えたことはありませんし、善行を積む機会を逃すこともありませんでした。私の誇れる美徳などほとんどありませんが、一般的な慈善行為と個人的友情を大事にしたぐらいでしょうか。(33)

この言葉でエーリュシオンへの扉が開かれ、主人公は想像で描かれた絵画

ではとても表現できないような美しい国に入っていくのである。ミーノースの公正な裁定は、治安判事を公衆のために薄給であるにもかかわらず病身を押して懸命に務めたフィールディング自身の姿勢の公正さを表しているようだ。

オレンジの木の甘い香りの中を進んでいった主人公は数年前に失った自らの愛娘に出会うことができ、二人は筆舌に尽くしがたい喜びに有頂天になり、何時間も抱擁しあってキスを交わしたと書かれる。ここには、1742年『ジョーゼフ・アンドルーズ』を出版して絶頂期にあったフィールディングを襲った不幸、つまり数ヶ月後に長女シャーロットが五歳で亡くなったことが描き込まれていることは間違いがないだろう。

最愛の娘を亡くしたフィールディングが、あの世で娘と再会する幸せを夢想し、それが本作執筆の動機になったことは十分考えられる。となると、本作の眼目は作品タイトル通り「この世」から「あの世」への死出の旅ということになるだろうか。

主人公のこの世からあの世への旅の描写は直線的ではあるのだが、そこに紛れ込んでくる逆向きのベクトルを持つ集団が読者の方向感覚を混乱させる。辻馬車を降りて川を渡り、その後は徒歩で死の宮殿に向かう一行は「数人の旅客（Passengers）が我々の去った世界に戻っていくのに出会った。彼らは再び受肉する魂なのだと教えてくれた」(22) のである。彼らは復活するのではなく別人に生まれ変わるのである。その人たちと会った後、一行はさらに進んでいくと「運命の車輪」(26) も目撃し、生まれ変わる者がくじを引いているのを目にする。彼らのうちに非常に陰鬱な表情を浮かべている者もおり、死出の旅の一行は彼らに同情するようになる。

> 我々は、もう一度肉体の中に入っていく魂たちを不憫に思った。それまでは密かに羨ましいと思っていたのだが。そして我々の眼前に拡がっているあの喜ばしい平野に是非とも行きたいと望むようになった。(28)

生き返る旅客たちが多数描かれることが象徴的に示すように、実はこの物語では、あの世については少し語られるのみで、あの世から振り返って見た「この世」の人生の数々の記憶についての語りが大半なのだ。特に第10章以降は、裁判官ミーノースに再三再四生まれ変わりを命じられたローマ皇帝の背教者ユニアヌスの物語のみになり、これは最終部のアン・ブリンの異質な物語を別にしても、本作の実に半分を占めているのである。ユニアヌスは本作中、17回も転生をしており、その度にミーノースに「この世」に追い返されている。

ユニアヌスは生まれ変わることを「次に世に出ること」（My next Entrance into the World, 39）と書いており、この言葉は例えば1778年に出版されたファニー・バーニーの『イヴリーナ』の副題「若い女性が社交界に出ること」（*History of a Young Lady's Entrance into the World*）を思い出させるもので、ユニアヌスの転生はあたかも新たな社会に乗り出すことのように聞こえてしまう。彼は何度人生を繰り返しても、前回までの経験を知恵として次の生に生かすことがないため、別人が別の人生を送った回想録としても読めるほどだ。これらの意味で、本作品は「あの世」に向かう旅について書かれたものというよりは、あの世から「この世」を振り返って見た雑多な姿を捉えた作品だと結論づけられるだろう。

4.　『リスボン渡航記』の憂鬱と満足

『この世からあの世への旅』の第14章でユニアヌスが修道士に転生したとき、彼は世間を軽蔑していたという。

> 私は何年も独房で隠居暮らしをしており、世間を軽蔑する傾向のあった陰鬱な私の気質には似つかわしいものでした。世間を軽蔑するとは、別の言い方をすれば立派な財産や才能を持った人すべてを嫉妬するということで、人間全般を憎み嫌うということでした。（53）

この箇所が示しているように、なにかを「軽蔑する」ということは、その対象のことが非常に気にかかるということであり、嫉妬や怖れなどの裏返しと考えられるであろう。本論のイントロダクションで引用した『リスボン渡航記』冒頭で日記の書き手が「死を軽蔑する」と書いているのは、文字通り挑みかかるというよりは「死」に対する畏怖が図らずも露呈している表現と捉えることもできるだろう。語り手＝フィールディングはストア派から「死への軽蔑」を学んだと言っており、それにもかかわらずこの上もなく愛してきた者たち何人かと「作者の意見では今生の別れをする」ことを、「人生でこれほど憂鬱な太陽が昇ったのを見たことがなかった」という自然描写に託して、最大の悲しみだと感じているのである。その意味では、作者の死への軽蔑は、述べられた途端にその勇ましさは涙の中に萎えているのであり、本作はそもそも死への空威張りとは無縁の作品だと考えられる。

ただ、書き手は隠遁する修道士と違い、これから旅に出ようとしており、その旅を日記に綴ろうとしているのである。それにもかかわらず、彼の身体は不自由であり四肢は動かず、誰の目にも死そのものまででないにせよ作者の重病の様子は明らかで、水夫たちはその悲惨な有様を見て侮蔑したりからかったりするので、彼の怒りは増すばかりであった。この状態で外国へ船旅をしようというのだから、侮蔑するのは許せないにせよ皆不思議に感じずにはいられなかっただろう。オックスフォード・ワールズ・クラシックス版のイントロダクションでイアン・ベルが指摘するように、この旅行記には「ほぼ完全に動くことができない者が記す航海の物語であるという矛盾」（xxix）が存在しているのであるから。

動けない人物が移動するという矛盾は、本作品に登場する帆船、ポルトガルの女王号が何度も出帆・後退を繰り返し移動において遅延するという特徴と直接関係するわけではないが、遅延＝脱線ということがフィールディング作品において重要な役割を果たすことを想起させる事態ではあ

る。停滞することが逆に物語を生むことは『ジョーゼフ・アンドルーズ』にも頻繁に見られることであり、例えば本論第二節で言及したジョーゼフの負傷と宿屋での停滞は、偶然に旧友のアダムズ牧師と出会う機会に繋がり、さらには恋人ファニーとの再会と旅の新たな展開に繋がるのである。

さらに作者は停滞した途端、またすぐに出かけたくなるのが人間であり、旅と移動は人間の歴史と同じぐらい長いのだと主張する。

> 最初の人間は旅人であって、彼と家族が楽園に定住したとたん、自分自身の家が嫌いになって、別の場所に向かう旅客(passengers)となった。ここから分かることは、旅をするという気質は人類の歴史と同じぐらい古く、人間始まって以来の呪いなのだということである。(573)

衝動のままに海に出て行ったロビンソン・クルーソーを思わせる言葉であり、18 世紀前半に活躍したダニエル・デフォーに代表される海洋冒険物語とは一線を画してドメスティック・ノベルのジャンルの旗手であったはずのフィールディングは、生涯最後についに帆船で海に出かけることになるのである。

ドメスティック・ノベルにおいても国内旅行はあった訳で、ジョーゼフもロンドンと田舎の間をうろうろと移動しているし、トム・ジョーンズもサマセット州とロンドンという長距離間を移動する。ただ、ドメスティック・ノベルの場合は往復運動が可能で、最後は振り出しに戻るのだが、しばしば海洋冒険旅行は行ったきり戻ってこない。『リスボン渡航記』でも、一行はロンドンを帆船で出た後、寄港地を通り過ぎながら（フランシス夫人の宿があるワイト島のライドは風の方向が悪く、例外的に長逗留しているが)、一方通行で外国ポルトガルのリスボンに到着している。もちろんこの作品が渡航記というノンフィクションの体裁を取り、船旅が療養地への片道分しか存在しない訳だから、当然そうならざるを得ないとはいえ、

冒頭での作者の最後の別れという決意を読む限り、親元に帰ることなど脳裏をかすめなかっただろうクルーソーの出立に近いものを感じる。

このことは先ほどの引用の中で、旅人を「通りすがりの者」（passengers）という言葉で規定していることからも明らかである。他の箇所でも作者は自分のことを「旅客（passengers）という形で世界を旅して回る羽目になった者」（613）と書いている。通りすがりの者、という意識は往復可能・再訪可能なドメスティック・ノベルの国内旅行とは全く性質が異なるものだ。一過性の旅人はその地の人々や風習の害悪を鋭く指摘できるが、深くコミットすることはできない。このような一過性という性質を持つ旅人に対して、宿屋が冷たいのも当然なのであって、ライドの民宿でフィールディング一行を泊めたフランシス夫人の鈍感・冷淡・強欲などが本作品では強烈に描き込まれており、作品中エピソードの中では有名なもので、フランシス夫人の悪徳は本作読者には知れ渡っている。ただ、作者が自らを通りすがりのものと規定してしまっている以上、この待遇にもやむを得ない側面もあると思われる。

1754 年 7 月 13 日、凪のためしばらくライドに留まる必要が判明したとき、作者は妻にワイト島へ上陸するよう説得される。彼は自分は海を愛する者であるが、陸地の新鮮な空気を吸うことにはそれ以上の快楽があるだろうと思い同意する。問題は「動くことができない」者の移動であった。

> 作品冒頭で私はすべての旅客（passengers）がそうだと述べたように、実際のところ自分は死んだ荷物なのであり、外的刺激なしに肉体的に動くことができないのだから、他人の助けを借りずに船を降りてそれを行う決意をすることは土台無理な話なのである。（594）

実際作者を民宿まで連れて行くのは、多くの他人の多くの助けが必要な大変な作業であった。車椅子に乗った作者を母船からボートに滑車で降ろ

し、ボートで浜辺近くまで運び、そこから泥海となっていたため二人の屈強な船員が車椅子ごと彼を担ぎ上げて陸地まで泥に浸かりながら運び、そこから担ぎ椅子で民宿まで運ぶ必要があったのである。作者はこれだけの苦労をしてまでやってきた宿でのホスピタリティを大いに期待しても罰は当たらないだろうと思っている。

ただ、ホスピタリティにもいろいろ種類はあるわけで、宿の女将であるフランシス夫人は、一行の到着を聞いてから主に気にかけていたのは家の掃除であって、暖炉の火もそのために消えていた。夕食用に豆とベーコンを始め必需品をあらかじめ運び込んでいたにもかかわらず、食事に関しては全くの手つかずであった。フランシス夫人が心を砕いていたのは客人の人間性というより紳士たちへの体面維持だったのである（597）。フィールディングは怒り心頭、「我々の空腹は彼女の虚栄のために犠牲として捧げられたのだ」（598）とまで言っている。

作者が最も重視したのは、ベーコンであり豆であり鹿肉である。つまり食事なのであり、本作を通して、食への拘りは並外れたものがある。不自由な肉体に阻まれた快楽のうち、食欲のみが満足させることができる唯一残されたものであったことも原因の一つだと考えられるが、野菜、豆、鹿肉、魚、ティー、ビール、羊肉、などへの作者の執着は凄まじいものがある。スモレットの感じた、眼前に迫った死を想っての静謐な諦観とはフィールディングはまるで無縁なのである。

作者がようやくフランシス夫人への激しい怒りを和らげるのも肉の欠如の代わりに豊富な新鮮な魚が手に入ったとき、つまり他ならぬ食欲が満たされたときのみである。夕食時、スターターとして豆とベーコンを食べて、量が足りないので余計に腹が減ったとこぼす一行は（といっても不満なのは主に作者本人である）、メインの到着を今か今かと待ちわびるが一向に来る気配がない。あらかじめ羊肉を注文していたにもかかわらず。業を煮やした彼は夫人に尋ねに行かせるが、今は屠殺の時期ではないと平然と彼

女は言いのけるのである。「そんなことを伝える必要がないと思っていたようで、隣に漁師が住んでいることを伝える必要がないと思っていたのと同じであった」(599) と書かれ、偶然隣の漁師が大量のヒラメ、タラ、ロブスターなどの釣果を挙げていたことを知るに至る。ロンドンで食べるより遙かにおいしい魚で、作者は狂喜乱舞する。

> 私たちはかつてホワイト亭で食したときよりも、大いなる食欲を見せて、より実質的で食べごたえある贅沢品によって、より大きな歓喜の念で、最良で最高に心地よく楽しい食事を終えることができたのである。(599)

メインがないと思った落胆から一転してのご馳走だったこともあるが、作者のこの喜びようは異常なほどである。ただ、作者は単に個人的な満足を得られればそれで事が済むとは思っていない。ロンドンから泥棒を一掃するのに大きな役割を果たしたフィールディングはイギリス人の公共の利益という視点を忘れない。フランシス夫人には魚と食事が結びつかなかった訳で、これほど魚という食べ物がないがしろにされている状況を嘆く。貧民の貴重で安価な栄養源となるはずだと訴えかける。併せて、作者はデボンシャーの海で獲れる魚が極めて安価であるにもかかわらず、ロンドンのマーケットでは極めて高価に取引されている問題を提起する。

> このような意見を述べずにおられないのは、この旅行を通してあちこちに自分の意見を書き込んだときと同じ考えからである。最良の動機からお国への奉仕を行う中で私は人生を終え、そうして命を終えることに満足している。ただその成果と言えば最悪で、手段を考えるのは私たちにできるのだが、目的が果たされることは滅多にないのである。(635)

食に異常な執念を持ってこの渡航記に書き込む作者だが、食を得るには他人を介さなくてはならない。序（The Preface）の中で、この旅行記執筆の目的が風景を描くことではなく、「人々や物事の真の貴重な知識を得る」（545）ことだと規定した作者は食を通して人を見ている（もちろん人を介しておいしい食を得るのも不可欠だが）。魚の流通がうまくいっていないことを問題視する中で、上の引用にあるようにフィールディングの公共奉仕という信念は貫かれている。またそれを実践した上で人生を終えようとしているという、自分の死をも見据えている点を見過ごしてはいけない。運命に抗おうとしたり、悲観したりするのではなく、彼は死を意識しながらもまだ悪を糾弾し、怒りを忘れない。そして問題や悪弊を、そして間違った人間のあり方を、こうして作品を通して世間に訴えかけることもやめていないのだ。

フィールディングはもちろん人間のすばらしい側面を見過ごすことはない。愚痴と悪口を言っているだけではない。ポルトガルの女王号のヴィール船長は、フランシス夫人と同じくその口汚さや品のなさや強欲ぶりが批判されていて、フィールディングが払った多額のチップを「はした金」と言って罵り、フィールディングあまりに腹が立ったので下船すると厳粛な調子で脅してやっと折れてくるような人物である（641-42）。だが、人間的な側面も持っていて、船の窓から一匹の子猫が海に落ちたときは、人目を憚らず嘆き悲しむ（593）。これを作者は「船長の人間らしさ」と呼んでも良いと感じている。この猫が海に飛び込んだ船員に救われて息を吹き返した時は「この善き船長が大いに喜ぶところとなった」（594）と描かれているのである。

ワイト島のライドでもフランシス夫人とは正反対の親切な貴婦人のことが描かれる。ライドを夫人たちが散歩していたとき、あるお屋敷の貴婦人が親切にも自分の庭に咲いている花々を見せてくれたり、果実を食べさせてくれたりして、一行は大いに元気になったという。この善き貴婦人を皆

は好きになったので、ワイト島を後にするときティーセットがないことに気がつくと、彼女に借りたいというお願いまでしている。この女性について、バウワーズは次のような分析をしている。

> この女性はジョンソンの「ペンズハーストに寄せて」が具現している、理想的だが消えつつある善意に基づく社会秩序を体現している人だ。「ペンズハースト」においては、仕事とは家事の延長にあり、社交的関係とは、不平等なものではあるが、人間同士のお互いへの責務によって支配されている。(590)

バウワーズはフィールディングの死にゆく弱った身体と弱りゆくイギリスという国家身体を対応関係にあると解釈しており、その論ではこの親切な貴婦人は古き良きイギリスの、そして今は消滅しつつある国家身体の象徴であると考えられている。論者はこの作品にあって「国家」という問題が重要な位置を占めているとは全く考えないので、大仰な論調には違和感を覚える。ただ、紳士階級の典型として自分を捉えているフィールディングがフランシス夫人やヴィール船長らを、目上の者に対する敬意に欠ける者たちと考えていたことは事実であり、上記の引用の主張には賛成するものである。「国家が失われつつある」という意識をフィールディングは持たなかったかもしれないが、彼自身がイギリスを去りつつあるわけで、この貴婦人が代表するようなイングリッシュ・ホスピタリティに惜別の気持ちを抱いているのは間違いないだろう。

イギリスとの別れが近いことは、旅が進んでいくに連れて、ポルトガルへの言及が増えてくることにも現れている。本作品のイントロダクションに書かれているように、そもそもフィールディングは暖かい療養地選定にあたって、フランスのエクサンプロバンスを考えていた（565)。しかし、陸路の旅は費用が高いのと、パリから馬車で５日もかかるので彼の病状か

ら考えて不可能であったため、海路の旅で辿り着けるリスボンが選ばれた。エクサンプロバンスより4度南に位置するので、より温暖であると考えられたからであった。

ポルトガルへの言及はフランシス夫人の宿で出された地元の酒であるウィンドの説明として、酒の色がポートワインに似ていると書かれる部分から始まる。商売上手な船長の話がなされるとき、ポルトガルのポルトに小麦を運び、それでポートワインをしこたま買い占めてイギリスに持ち帰って大もうけをしたことが述べられる（633）。ポルトガルのハムが安価であることも指摘されている。

7月27日にイギリスを離れた後、ポルトガルの女王号は無寄港でリスボンを目指す。陸地が見えなくなってからは新鮮な食材が得られないこともあり、陸地への想いは募る。8月2日にはパンまでもが底をつき乾パンしかなくなり、作者は人生で初めて一欠片でいいからパンを食べたいという気持ちを覚えている。

8月5日月曜日、一行はようやくヨーロッパ大陸最西端に位置するロカ岬に到達し、テージョ川に入りベレンの塔に至る。ここは船の通関手続きが行われていた場所で、フィールディングの船も無事審査に通り、ようやく作者の上陸となった。彼は上陸の前においしい夕食をすでに注文しており、3時間も待たされたあげく上陸。グレート・ブリテン島南沿岸を走っていた時にもまして最大の食欲を覚えている作者にとっては、食事は最大の関心事であった。ポルトガル風担ぎ椅子で運ばれ、一軒のコーヒーハウスのような店に連れて行ってもらう。車椅子の不自由をかこち、1755年のリスボン大地震直前のリスボンの街並みを、世界一人口が多く世界一汚い街路だとけちをつけながらも、丘の上に建った気持ちの良いレストランで「おいしい夕食に舌鼓を打った」（659）のである。フィールディングがこよなく満足した瞬間であった。この旺盛な食欲が満足された瞬間、つまり「生」が満たされていることを実感できる時こそ、フィールディングに

とっての「この世」への志向が最も強く示された至高の結末なのである。

注記

本論文の研究は科研費（研究課題番号：15 K 02299）の助成を受けたものである。基盤研究（C）、課題名「イギリス小説と地理学的想像力」

参考文献

Bowers, Terrence N. “Tropes of Nationhood: Body Politic, and Nation-State in Fielding’s “Journal of a Voyage to Lisbon”.” *ELH*, Vol.62, No.3 (Fall, 1995), pp.575-602.

Fielding, Henry. *A Journey from This World to the Next* and *The Journal of a Voyage to Lisbon*. Oxford: OUP, 1996. The World’s Classics.

Fielding, Henry. *The Journal of a Voyage to Lisbon, Shamela, and Occasional Writings*. Oxford: Clarendon Press, 1996.

ヘンリー・フィールディング　『リスボン渡航記』、鳥居塚正訳、株式会社ニューカレント　インターナショナル、1990 年。